

肥瘠

既に死脈うち申候につき、信玄公御分別あり、各譜代の侍大將衆、御一家にも人数を持給ふ人々、悉く被召寄、信玄公被仰○中、舍弟道遙軒○武田信綱、今夜甲府へ使に行と申、心安き小者四人つれ出るふりにて、物共をば土屋右衛門尉所に預け、此曉かごこしに道遙軒をのせ、信玄公御煩に付て甲府へ御歸陣也と申候は、我等と道遙軒と見わくる者有まじく候、累年見るに、信玄がおもて、を各をはじめ、しかとみるものなく候と相みえ候へば、道遙軒を見て、信玄は存命なりと申べきは、必定なり○下。

〔日本書紀五崇神〕六年、先是、天照大神和大國魂二神並祭於天皇大殿之内○中、以日本大國魂神、託淳名城入姬命祭、然淳名城入姬○ヤセカ、髮落體瘦而不能祭。

〔古事記下雄略〕故其赤猪子仰待天皇之命、經八十歲、於是赤猪子以爲望命之間、已經多年、姿體瘦萎、更無所持。

〔今昔物語 二十八〕三條中納言食水飯語第二十三

今昔三條ノ中納言ト云ケル人、有リケリ○中、長高クシテ大ニ太テナム有リケレバ、太リノ責ヲ苦シトテ肥タリケレバ、醫師和氣□ヲ呼テ、此ク極ク太ルヲバ、何ガセムト爲ル、起居ナド爲ルガ身ノ重クテ極ク苦シキナリト宣ケレバ、□ガ申ケル様、冬ハ湯漬、夏ハ水漬ニシテ、御飯ヲ可食キ也ト、其時六月許ノ事ナレバ、中納言□ゾ然ハ暫ク居タレ、水飯食テ見セムト宣ヘケレバ、宣フニ隨テ□ケルニ、中納言侍ヲ召ハセバ、侍一人出來タリ、中納言例食ノ様ニシテ水飯持來ト宣ヘバ、侍立ヌ、暫許有テ、御臺行ヲ持參テ御前ニ居ヘツ、臺ニハ箸ノ臺二許ヲ居ヘタリ、次ギテ侍盤ヲ捧テ持來ル、□ノ侍臺ニ居フルヲ見レバ、中ノ甕ニ白キ干瓜ノ三寸許ナルヲ不切ズシテ十許盛タリ、亦中ノ甕ニ鮪鮎ノ大キニ廣ラカナルヲ尾頸許ヲ押テ卅許盛タリ、大キナル鏡ヲ具シタリ、皆臺ニ取り居ヘツ、亦一人大ナル銀ノ提ニ、大キナル銀ノ匙ヲ立テ、重氣ニ持テ前ニ居タ